

吉雄流外科2 乳癌篇

板野 俊文

香川大学

江戸中期の大通詞であった吉雄耕牛とその弟蘆風が開いた成秀館で全国から人を集めて医学教育が行われた。当時の著名な蘭学者の多くはここで学んでいる。その中で外科に関する講義と実習が行われたが、これを吉雄流外科という。しかし、その実態は不明な部分が多い。教科書としては全国で吉雄流膏薬、油薬、水薬が残されているが、これらから外科の内容を覗うことはできない。何故そうなったのか？外科手術などの詳細は門外不出とされていたからである。しかし、成秀館の聴講生のひとりで讃岐の医家であった合田強とその弟大介の残した講義録等を読むと、吉雄流外科の内容がわかる。今回は乳癌篇である。

乳癌に関しては永富獨嘯庵の『漫遊雑記』の記述がよく知られている¹⁾。曰く「乳岩ハ治セズ 古ヨリ然リ 和蘭書中言スルコトアリ 曰ク其ノ初發梅核ノ如クナルトキハ快刀ヲ以テ之ヲ割キ後 金瘡ノ法ニ從テコレヲ治スト コノ言味アリ 余未ダコレヲ試ミズト雖ドモ 書シテ以テ後人ニ告グ(原文漢文15丁表)」。この内容は後に華岡青洲に影響を与えたとされるが、では一体どこに原典があるのか？

合田強は宝暦12年(1762)長崎で成秀館に学び、讃岐に帰る途次、熊本で獨嘯庵と弟子の龜井魯庵と邂逅する。そこで、吉雄耕牛の講義録5巻を見せ、長崎行きを進める。獨嘯庵は直ちに長崎に行き、外科の講義を受けた。その後、帰郷し、翌宝暦13年に『漫遊雑記』を書いた。強は外科には造詣が深くないので、弟の大介を何度も長崎に行かせている。大介の残した講義録²⁾には外科の記述があるが、それを以下に示す。

「註云 何レヘ出テモ初梅核ノ如クアル時切取事ヲ良トス 時々変色ヲアラワシテ色キワマラサルモノ也」。以上より獨嘯庵の記述は長崎の成秀館で得たものと判断した。

では原典は何か？ その一部はローレンツ ハイステルの『外科学教典 “Institutiones Chirurgie”』と思われる。これらについて報告する。原典は多くの言語で出版されているが、現在では英語版³⁾がインターネットで閲覧できる。関連する乳癌の部分を以下に訳す。

「非常に重要な手術に進む前に、まず、隣接する腋窩リンパ節が変調されているだけか、それともその代わりにがんと連絡しているかを明らかに必要がある。その場合、乳房を切除しても患者は治らない。他の部分に隠されているがんのウイルスが、同じ障害を短時間で再発させる。(中略)多くの場合次のようにして手術を行う。メスで慎重に分離された癌の外皮に大きな重要な切開を行う。その後、両側の部分の健全な部分から分離された癌を摘出する。その後図に示す大きな針で結紮する。または他図に示すように、フックのみで障害部分を持ち上げることができる。私自身は、図で表されるように、乳首から肩まで広がった拳よりも大きい癌をしばしば摘出した。メスでまっすぐな方向に切開し、病的部分と健全な部分から正確に分離する。」

本発表ではこれらの図などを中心に、その後の研究などについても発表する。

参考文献

- 1) 永富獨嘯庵 漫遊雑記 明和元年9月 浪速 柳原喜兵衛 15丁表
- 2) 板野俊文 合田大介の『紅毛醫術聞書』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第64巻 第4号(2018) 417-441
- 3) Internet Archives, The Medical Heritage Library, A general system of Surgery in the three parts. By Heister, Lorenz (1683-1758) Part the Second, Chapter CVII, 13-18